
俺とチートと性転換!?

きびっぴ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺とチートと性転換！？

【コード】

N6602X

【作者名】

きびつぴ

【あらすじ】

本文にて詳しい内容説明をしています

ストーリー

どこにもいそうな平凡な高校生山田優希はいわゆるオタク、そんな優希がある日学校の帰りの途中にいきなり真っ白な空間に飛ばされてしまう

そこにいたありとあらゆる世界を創造したという自称神によってさらに別の世界に飛ばされる優希！

優希が飛ばされた先は魔法が飛び交い魔物から身を守る人間たち、そこは科学より魔術が進歩した一種の平行ワールドだった！？

果たして優希の運命は！？

そして、神の目的とは一体！？

あのゆめにつき〜小説版〜のきびっぴが送る

笑いあり、シリアスあり？、性転換あり！？先が読めそうで読めない破天荒なドタバタコメディーがいまはじまる！

第一話 俺は神に選ばれた

今日も学校に行ってそして授業を受けて、そして家に帰り、明日の用事などをチェックして寝る、

そんな毎日が繰り返し続くのが日常ってやつだが、俺はそんな日常に軽く哀訴がついていた。

空から少女が降って来るわけでもないし、はたまた曲がり角を曲がったら食パンをくわえた少女とぶつかる事もない

さらにいうと恋愛的なフラグが立つ訳でもない訳であって、極端に言うとおつまらないと言うことになるだろう。

特に今日なんて学校がインフルエンザの影響で休みときた、なんでこんなにも平凡な日常が続くのか、神に問いかけたいくらいだ、さんざん皮肉を言っているが只単に暇なわけだ、馬鹿は風邪を引かないらしいし、仮に俺が風邪を引いたらこんな風に目の前が真っ白な空間になつて手足の感覚が妙におかしくて…

「…え？どこどこ？」

おかしい、俺はいますさっきまでインフルエンザの影響で学校が休みだからネットカフェで暇を潰そうと歩いてたはずなんだが…

「いらつしや〜い」

「うお!？」

なんだ？このつるぺた少女は？

「つるぺたって言うな〜！お姉さんって言うて!!」

「…いや、全く状況が掴めないんだが？」

「ここは神の部屋なのです！そして私は神なのです!!えっへん」

…何なんだ？この某アニメにでてくる超ロリ教師みたいな子は？迷子か？

「つて！誰がこ〇え先生なのさ！神だつて！」

「心を読むな！てか神の部屋つてなに！？俺死んだの？」

「死んでないですよ 貴方は選ばれたのです。」

「何に？」

「主人公です。」

「へ？」

「貴方は世界を創造した私に異世界旅人として選ばれたのです。」

「…つまり？」

「暇じゃなくなりましたよ！」

「あ、噛んだ、」

「と、とにかく！このチートで世界を旅してきてください！」

神？がそう言った刹那、俺の意識はまるでテレビの電源を切ったかのようにプツリと途切れた。

第一話 俺は神に選ばれた(後書き)

初めてのオリジナル小説だ！
わっしょいわっしょい

第二話 俺はパラレルワールドに飛ばされた

目が覚めるとそこにはあの某オンラインゲームのマビ〇ギみたいな世界が広がっていた。

「え?」

まずすごい疑問に思う事がある。

「何故女になってる!?!」

すると何処からともなく神の声が聞こえてきた

「はいはいお悩みの時は何でも御座れ!!神様たんです!」

「いやいやいやいや!!神様たんですじゃねーよ!何で女になってんだよ!」

「それはこの物語の題名が俺とチートと性転換!?!だからです。」

「いきなり!?!もうちよい話進めてからで良くない!?!」

「え?まあ戻ろうと思えば戻れるよ?」

「え?そうなのか!?!」

「まあチートの塊みたいな感じだからねえ」

「はあ、チートねえ」

「ついでに言うと今君は

- ・体力無限
- ・攻撃力無限
- ・魔法攻撃力無限
- ・守備力無限
- ・魔法守備力無限
- ・MP無限
- ・PP無限
- ・状態異常にならない
- ・全ての魔法を使える
- ・全ての特技を使える
- ・腹減らない
- ・疲れない
- ・所持金1000円

だよ」

「円？Gとかじゃないのか？」

「まあ一応日本だからね」

「ってことは…所持金すくねえ!!」

「まあ一応君の財布の中と一緒にしといたから」

「そこもチート使えよ!!」

「いいじゃんカツアゲすれば」

「良いわけねえだろ！」

「大体ねえ君たち人間はお金なんだって変な概念に捕らわれ過ぎなのさ」

「アンタがそうさせたんだろーが!!」

「まあいいじゃん、早速冒険を始めましょう!」

「まず男に戻ってからな」

そう言ったあと俺は超美人の女の子から元の男に戻った

第三話 俺は武器を手に入れた

「あ、戻っちゃうんだ」

「さすがに初っぱなから性転換はきついしな」

「可愛かったのに」

「またいつかな、つーか武器がねえな…」

「自腹だよ？」

「はあ！？自腹！？チートは！？最強武器とか初っぱなから持つてるもんだろ！？」

「いやいや、そこは作ろうよ、神様だって何でもできる訳じゃないんです！」

「作れって言ったって…あ、そうか！」

俺は頭の中で聖剣エクスカリバーを思い浮かべる

「私になにか用か？」

「おお！出来た！！…けど何か違う」

「馬鹿め！少年よ、まずは私の伝説を聞くがいい、私の伝説は約12世紀から始まった、あの頃は」

「何もソ○ルイーターのエクスカリバーを出さなくても…」

「…うぜえ、消そう」

「私の朝は一杯のk」

とりあえずエクスカリバーを消して新しい武器を考えることにしよう

「刀…とか」

俺は頭の中で刀をイメージした

「優希もまともな剣作れるじゃない」

「さっきのはなかったことにしてくれ」

「只の刀じゃつまらなくない？」

「例えば？」

「そうね…あ、私が中に入ろうか？」

「…いやいや、神様振り回すのは流石に…」

「いいじゃない、百花○乱の直江○続だって母神体のハンマー振り回してるじゃない」

「いや、マニアックなアニメ出てきたね！ついでに言うと俺は後藤又○衛が好きだけど…」

「私は真田○村かな」

「ああ、○宮さんね」

「中の人の情報知らない!!」

「よく考えたら武器要らないんじゃないか…」

「そうね、言っちゃえばパンチするだけで魔王がKOする力を持つてるのよね…」

「てかキャラが成長してないか？最初あった時は可愛い幼女だったじゃねえか」

「あれは初対面で警戒されるのを防ぐ為、元の姿はすごいから」

「どんな？」

「人間の姿をしてるわね」

「ふむふむ」

「貴方の隣の家に居たわ」

「は！？そんな近くに居たのか!？」

「小学校卒業と同時に転校したっけ」

「まさか…」

「私の名前は山城紗季」

「さっきーだったの!？」

「え？知らなかったの？」

「いや？全然？」

「ま、まあいいよわかってくれただけ」

「なんつーか、神様って感じが全くなかった」

「まあ神様は神様だから」

まあいいか

第四話 俺は仲間を手に入れた!?

「なあ、いくら無敵でも仲間は欲しいよな」

「仲間なら居るじゃない」

「いやさっちは仲間だ、だけど姿が見えないのは…」

「じゃあうちくる?」

「だって元の世界だろ?どうやって行くんだよ?」

「ん?この世界だよ?」

「え?そうなのか!?」

「うん」

「てか家に居るのか!?」

「まあねえ」

「本当、何でもありだな、」

「いいじゃない神様なんだもん」

「神様ねえ」

「優希だって神様に匹敵するくらいの能力手に入れたじゃない」

「あくまでもさっちーにもらった力だぜ？」

「私はこの世界に飛ばしただけだけど……」

「え？俺って天然のチートなの？」

「そだよ、知らなかったの？」

「神に匹敵があ、今度戦ってみるか？」

「うーん……いいんじゃない？」

「いいのかよ！？神様だろ！？」

「いいよ別に」

「まあいいか」

「まあ、知らないだろうけど優希は生き別れた双子のお兄ちゃんだしね」

「え？そうなのか！？」

「うん、さっきわかった」

「でも親が違っじゃんか」

「私は一人暮らしだったよ？」

「え？一人暮らし！？」

「まあ、たまに親が様子見に来てたけどね」

「だからしょっちゅう隣にお裾分け持って行ってたのか」

「そうみたいね」

「とりあえずさっきーの家に行くか」

第五話 俺は目的を手に入れた!?

「で、着いたは良いが…」

「久しぶりだねお兄ちゃん」

「いきなりお兄ちゃん呼びですか」

「うーん、でもなー優希って呼ぶよりお兄ちゃんって呼んだ方がしっくりくるのよね」

「なあ紗季」

「ん？なに？お兄ちゃん、」

「紗季の合計値ってさ、」

「うん、」

「全てMAXだよな？」

「うん9999だよ？」

「じゃあ の俺には敵わないわけだ」

「…ま、まあね」

「戦つか？」

「ふえ！？」

「大丈夫手加減するから」

「う、うん」

「リミッターでもつかうか」

「うん、そうして？」

「いくぞ！」

「ええ！」

「超電〇砲！」

「！？幻〇殺し！」

キュピイン

「やるな、」

「まあね次は私の番よ！」

「サ〇ダガ！」

「イオ〇ズン！」

ドーン！！

「クツ！！なかなかやるな、だがこれはどつだ！」

「な、何！？」

「情報連結解除」

「そんな！！こつなったら…」

「閉鎖空間創造」

「ふ、甘い！」

「神人狩り！」

ピキツバリーン！！

「きゃあああ！」

「大丈夫か！？」

「えへへ、やっぱり勝てないや」

「今日はおしまいにしてよう」

「ねえ、お兄ちゃん」

「なんだ？」

「これからは毎日修行、お願いね」

「明日からな、今日のは小手調べだ。」

「リミッターつけてこの強さなんだね」

「まあな」

「今日はうちに泊まりなよ」

「え？住むよ？」

「言うと思った」

「ハハハ」

「まあ実家だからね」

「そうなの!？」

「まあいいじゃない」

第五話 俺は目的を手に入れた！？（後書き）

何か久しぶりにあとがきを書いていますきびっぴです

～キャラ設定～

優希

身長 168

体重 58

年齢 15

強さ 神以上

職業 紗季の兄（つまり神）

-----作者メモ-----

最初はフルネームで書いていたが名字を忘れて今では優希や、お兄ちゃんと書くことが多い

紗季

身長 166

体重 54

年齢 15

強さ 神～神以上

職業 神

-----作者メモ-----

フルネームは考えていたが優希同様忘れた、基本的に紗季と呼ばれることが多いついでに優希の双子の妹、すごく甘えん坊

その場で思いついて書いているので話の展開が極端に急です。

最終回はまだ解らないです、まあおおよその展開は考えています。

徐々に軌道修正入れながらシリーズに持ち込みたいです

第六話 俺は真の目的を手に入れた

「ただいま」

「はいお帰りなさい」

「あれ？紗季だけか？」

「だってお母さんたちお兄ちゃんの家に住るじゃない」

「ああ、そうか！」

「念のため電話したら？」

「通じるのか？」

「お兄ちゃんなら大丈夫だよ」

「そうか、じゃあかけるわ」

『もしもし？優希？どうしたの？』

「いまさ、紗季のところに居るんだけど」

『そうなの？じゃあ力は？』

「大丈夫、正常だよ、紗季よりも強いから」

『なら安心ね、まさか優希が紗季ちゃんを抜いちゃうなんて、流石

双子ね』

「何で紗季が俺に全て話したこと前提で話してるんだ？」

『ふふ、だってあなたたちの母親よ？』

「…観てたのか？」

『ふふふ、正解』

「まあ、だいたい予想ついてたが…」

『あ、そうそう、たのみごと頼まれてくれる？』

「なに？」

『魔王を倒して？』

「魔王？何でそんな人間的S級クエストなんか…」

『神的G級よ？』

「モンオンか！」

『紗季ちゃんと力を合わせないと倒せないわよ？』

「そんなに！？」

『二階の私の部屋にフープゾーンがあるからそれで魔王の世界に行つてらっしゃい』

「ちょっと？魔王の世界ってなに？…切れてる」

「どうしたの？」

「魔王の世界に行つて魔王を倒せだと」

「なんだ神的E級じゃない」

「いや？神的G級らしいよ？」

「え？モンオン？」

「同じツツコミー！？」

「じゃあいく？」

「母さんの部屋にフープゾーンがあるんだってよ」

「部屋に！？」

「本当昔から変な設定好きだよな」

「この前なんか冷めれば冷めるほど熱くなる肉じゃがを送ってきたよ」

「何それ！？」

「冷めきつてたから火にかけたら凍りついちゃって」

「…本当変わったるよな」

「お母さんって年取ってないよね？」

「そう言えは…何故だ？」

「え？怖い！」

第七話 俺達は旅に出た

「ま、まあ神だから成長を止めてるんだろ……」

「そ、そうよね、うん」

「で、これは？」

「エ○トリープラグ？」

「エ○アングリオン！？」

「転送機……だとおもっ」

「毎度毎度パクリネタいれんなや……！」

「すみません！by作者」

「いきなり出るな……！」

「いや、ほら、たまにはいいかな……って思いました」

「よくないわよ……！」

「ええ……まあいいやではこれで失礼しますよ」

「……呆れた、本当に呆れた」

「紗季、呆れたら作者の思いつきばだぞ」

「そうよね、うん」

「まあいいや、じゃあ行くか？」

「ええ」

「…」

「俺んちだな、」

「しかもこの部屋…」

「母さんの部屋だな」

「魔王は？」

「解らん」

「…」

「……」

「あ、母さんだ」

「ようこそ 私の部屋へ」

「…突っ込んでいい？」

「ふふふ だーめ」

「いやいやいやいや！ここ俺んちじゃん！魔王の世界とか普通じゃん！」

「大丈夫！外に出たらロボットがいっぱいいるから」

「近所迷惑よね？それ」

「大丈夫！封絶張ってるから」

「灼眼の○ヤナ！？」

「まあいいじゃない？」

「良くないわよ……」

「で？魔王はどこにいるんだ？」

「ふふ、ひ・み・つ」

「うわぁ〜マジ無いわ〜マジ萎えるわ〜」

「優希ったら私はあなたの母親よ？結ばれてはいけない運命なのよ？」

「そっちの意味じゃねえよ！」

「あら残念」

「で？魔王はどこなの？」

「…”八ヶ岳”よ」

(八ヶ岳とは、埼玉県と山梨県の境にある山の名前です)

「遠!」

「ここからだ、そうね1ヶ月くらいかしら」

「歩き限定!」?

「だって封絶張ってるから」

「他の人はマネキン状態ってことか…」

「つまり電車も車も使えない訳ね」

「母さんは?」

「私免許証無いから、ごめんね」

「あ! ワープすりゃいいんじゃない!」

「封絶の中じゃワープできないようにしてあるから」

「…もうこれ以上突っ込むの止めよう」

「宿とかどうするの?」

「ホテルとかは使えるわ」

「所持金1000円何だが…」

「そうね、じゃあおこずかいあげるわ」

「…50万円」

「どこからそんな金を…」

「昨日3億円引き出しといたのよ」

「うわぁ〜超金持ち」

「丁度宝くじが当たったのよ」

「…我慢我慢」

「じゃあ行ってらっしゃい」

「はぁ」

「…行きましょ?」

「あ、ああ」

第七話 俺達は旅に出た（後書き）

ちよつと話しが急過ぎたかな？

第八話 俺達は旅に出た2

「歩き限定でしかも千葉から埼玉とかマジキツイわ」

「しょうがないじゃないの、封絶なんだし、閉鎖空間で人がまったく居ないのよりはマシでしょ？」

「はあ…せめてワープ使えたらなあ」

「できないようにしてあるし、仮にしたとしたらこの小説がすぐに終わっちゃうわよ？」

「そりゃそうだな、作者的にも性転換の要素あその場面しかないのは題名的にキツイよな」

「いやいや！ネタはありますよ？」

「だからいきなり出るな！」

「ついでに作者さん的には更新の日時がバラバラな訳で思いつきで書いてます」

「あのお、そういうのはあとがきで言ってくれない？」

「…さっきから聞いてりゃよ！あんたら作ったの誰だと思ってんだ！？俺はいつだってあんたらの超チートを無くすことだって出来るんだぞ！？」

「…」

「ああ！気分わりい！もう帰るわ！」

「…」

「行っちゃった…」

「何かすごく力が弱くなった気がする」

「私も」

「って！何この弱さ！」

優希

レベル1

オール1

紗季

レベル1

オール1

「…」

「酷いわね」

「やりたい放題だな」

「反省した？」

「「すみませんでした」

「解ればいいんだよ、ほれ」

優希達の強さが戻った

「一つお願いがあるんだが…」

「何？」

「移動手段を下さい」

「あるきでよくね？」

「私もお願い！」

「そんじゃ、ステップワゴン乗っていいよ？」

「運転出来ない…」

「いや、俺運転だし」

「え！？マジ？」

「ちよい待ってて」

「あ、来れるんだ」

「実際に来るわけ無いでしょ？どうせ無人のステップワゴンに決まってるわ」

「お待たせ」

「本当に来た！！」

「あれ？作者さん男じゃないの？」

「いやね、小説入ると女になっちゃうのよ」

「御愁傷様です」

「え？二ノ宮くん？」

「違うから！そういった意味じゃねえよ！」

「それじゃあかずなりくん？」

「嵐じゃねえよー！」

「まあ冗談はここまでにしてしましょ？」

「てか車が痛いわー！！」

「そう？初音〇クだけど…」

「十分痛いよ…」

「まあ乗ってよ」

「何か聞く？」

「私は何でもいいわよ？」

「そっ？じゃあこれ」

想いは優しいきしめええん

「…トゥルー〇イハート」

ガチャガチャきゅーっとファイギュ@

「フィ〇ユ@…」

北の〜酒場通りには〜

「いきなり演歌!？」

幸せは〜歩いて来ない

「365歩のマーチ真〇波バージョン…」

この大空に〜翼を広げ〜

「翼をください綾〇バージョン…」

F r i m e t o t h e m o o n

「なんなの？エヴァンゲ○オンがすきなの？」

「そつよっ？」

「…」

かくして俺達は魔王が待つ八ヶ岳へ向かった

第九話 俺達は旅に出た3

「最悪だ…」

何が起きたかと言つと

10分前

「仕方ないわね…」

「まともな曲あるの?」

「まあ、1つ1つのしかないけど…」

離れてる気がしないね

「オレ○ジレンジか…」

「ねえきいちゃんエグ○イルある?」

「んー、無いわね」

「ええ」

「ごめんね」

「まあいいや」

「何だよこのガールズトーク…」

「ゆうちゃんも入れればいいじゃない？」

「いや、俺男だし…」

「私だって男の子よ？」

「いやいや！女じゃん！」

「こづいづのは使い分けるものよ？」

「そうよね！使い分けるものよね！」

「さあちゃんだってこづ言ってるんだから」

「でも自分からなりたいなんて思わねえだろ！？」

「じゃあくしやみしたら女の子になるようにしてあげようか？」

「Tooover!？」

「じゃあ水被るとか？」

「ら〇ま2/1!？」

「じゃあ薬」

「怪しいから！女になるつもり無いから！」

「…ああ！もうはつきりしろよ！てめえ男だろ！？俺だってやりた

くて女やってんじゃないかねえんだよ!」

「…いや、すまん」

「もういいわ、男に戻るわ」

「戻れんのかよ!」

「あ、」

「ん?どうした、紗季?」

「あ!ガス欠した!」

「はあ!?!」

「今に戻る」

である。

「本当に最悪だ」

「徒歩決定か…」

「いいんじゃない?もう八ヶ岳のふもとだし」

「登山か…」

「あ、時間切れだ、」

「帰るのか？」

「女に戻るだけだ」

「そうか、」

「こんな感じで」

「制限時間つきとかつらそうだ……」

「逆だったらいいのに……」

「まあそんなに落ち込むなよ」

「良くここまでこれたな！」

「だれだ！？」

「魔王だ！」

「あ！久しぶりい〜」

「あ！お久しぶりです、作者さん」

「元気にしてた？」

「ええ、お陰様で」

「ちよい待て！なに？え？知り合い？」

「そつよ？」

「ここに魔王城建てたのは何てったってきびっぴさんだしな」

「…そんなにすごいのか!？」

「まあ作者ですから」

「それにいつみてもナイスボディだしなあ」

「ふふ また鼻の下のばして…奥さんに言っわよっ」

「そ、それだけは…」

「ならいいわよね」

「あ、ああ」

「何か魔王が凄く弱く見えてきたわ…」

「実際弱いだろ…多分」

「まあ魔王の所まで行きましょ？」

「ああ、」

「じゃあまた後でね？」

「手加減はせぬぞ」

「別に私は戦わないもの」

〈魔王城奥地〉

「…なんかあっさり来れたな」

「まあ裏道教えてもらったし」

「待っていたぞ」

「お前が…魔王」

「創造よりも若いわね」

「つべこべ言ってる暇はない…！」

「来るのか？」

「さあ、殺りあおうか…」

「…初っぱなからどす黒いオーラ出まくってるんだが」

「…！…来る…！」

「紅蓮暗黒死滅弾」

「ぐあああああ！」

「お兄ちゃん！」

「だ…大丈夫だ」

「どうした？攻撃してこないのか？」

「ラブフォーマツトバスター！！」

「…ぐっ！」

「きかぬわ！！」

「いや、今おもっきしぐっっていったよね？」

「知らん！」

「軽く受け流された！」

「残裂ガイア砲」

「きゃあああ！」

「紗季！」

「私は大丈夫！だから魔王を！」

「ふん、一つ教えてやろう、私はお前達の父親だ！」

「は？」

「何で今回に限って突っ込み処が多いんだ！」

「これは試練だ！」

「話が急すぎる！」

「いくぞ！紅蓮暗黒死滅弾！」

「きゃあああ！」

「紗季をよくも！」

「ふん、まだ覚醒しないか……」

「力を！」

「ぬ？」

「覚醒させる……！」

「……ふん、やっと覚醒するか」

「ああああああ……！」

「お兄……ちゃん？」

「紗季！大丈夫……？」

「お兄ちゃんが……女の子になってる」

「それこそ優希の本来の姿！性転換してない訳ではない！最初から性転換はしていたのだよ！」

「…え？」

「え？」

「不思議に思わなかったか？優希といういかにも女の子のよつな名前に！」

「まあ…言われてみればそうね」

「後優希と書いてゆきと読む！」

「いや！ストーリーにおもっきしゆうきって書いてあったし…」

「とにかく！免許皆伝だ！」

「もう突っ込みようがない…」

「あと、女の子であり男の子だからな！」

「今は男の子だからな」

「それぞれの性別の自我があるのだよ」

「へえ」

「まあ今日はここまでだ、」

まあ色々あったが魔王、もとい父さんに勝った俺達だった

第十話 私達は楽しんだ(前書き)

今回は性転換しました!!

長かった、凄く長く感じた…

題名は優希 目線です

まあ新展開です

第十話 私達は楽しんだ

「はい行きなり出てきてごめんね〜優希 だよ」

「優希 もいるぞ」

「私達は今精神空間に居ます」

「もちろん今後について話し合いをしてる所だ」

「んもお〜そんなに堅くならないで良いじゃん！もっとフレンドリ
ーにやろうよ」

「お前って元々清楚キャラじゃなかった？」

「…バレました？」

「スゲーやりずらいからやめてくんねえか？」

「すみませんでした」

「で、今さっきのはどういっ…」

「作者さんからのアドバイスで…」

「あの野郎！」

「そ、そんなに怒らないで下さい」

「まあ優希が言っんなら…」

「ではこれからですが、主に優希さんが中心の方向で行きます」

「つまり性転換しても主に俺って事だな」

「はい、あ！大丈夫です、私が軽く混ぜりますから」

「つまり男のプライドを壊す事はない訳だ」

「はい」

「そいじゃ別にいいかな？」

「たまには私も出して下さいよ？」

「勿論だ」

「じゃあ行きますか」

「ああ」

〈優希の家〉

「お兄ちゃんお帰り〜」

「ただいま〜」

「どうだった？」

「今とほとんど変わんないぞ?」

「あんなに嫌がってたのに」

「今なら作者の気持ちがわかるよ」

「へえ」

「まあいいや、紗季、行くぞ」

「どどこ?」

「色々汚れたからお風呂に」

「ふえ!?!」

「知らない間にこんなにおっきくなって」

「や、やあ」

「まあ私には届かないけどな!」

「うみゆう」

「あゝもう我慢できない!お持ち帰りする!」

「にゃああ」

「ふっふっふゝ良いではないか」

「あーれーお戯れをー」

〈数分後〉

「お風呂も入ったし、行くかあ」

「ああ気持ちよかったあ」

「お姉ちゃん、大きいよね、双子だとは思えないくらい」

「大丈夫だ！紗季だってその内こんぐらい大きくなるよ！」

「よし！牛乳飲むぞ」

「おおー！」

第十一話 私達は母を食べました(前書き)

今回は超きわどいです!!

ちよっちやバイです(汗)

第十一話 私達は苺を食べました

「ねえお姉ちゃん」

「ん？なに？」

「苺食べる？」

「い、いいねえ〜苺」

「はい、苺と練乳」

「れ、練乳」

『どうした？優希』

『凄くドキドキします…』

『おいおい、頭大丈夫か？』

『だ！大丈夫です！！』

『ならいいが…もしかしておまえ』

『ち、違います！決して破廉恥な事なんて…』

『破廉恥な事？俺は練乳食うのが初めてかと…』

『え？そ、そう、そうなんですよ！』

『ふーん、まあ別に俺はどっちでもいいけどよ』

『じ、じゃあそろそろ戻りましょうっ？』

『な、なあ…』

『はい？』

『俺のふりをして貰いたいんだが…』

『どうしてですか？』

『俺…苺が嫌いなんだ』

『じゃあなんで食べると？』

『しらん』

『まあ、多分私でしょうが…』

『好きなのか？苺』

『ええ、大好きですよ？』

『そうか…』

『そうなんですよ』

『そろそろ戻るか』

『そうですね』

「どうしたの？お姉ちゃん」

「え？いや？なんでもないよ？」

「ならいいけど…」

「ほら、食べよ？」

「うん…あれ？」

「ん？どうしたの？」

「練乳が開かないんだけど…」

「ちょっとかして？」

「うん…」

「じじいのはじじい…」

「あ！お姉ちゃんダメ！そうやって開けると…」

「んあ！はあはあ…」

「いや！ダメ！ああん！」

あくまで練乳を開けようとしています

「んあー出る！あー！らめえええ！」

しつこいですが練乳を開けようとしています

どぴゅー！びゅるー！

「ひゃわあ…いっぱい出たあ…」

「うわあドロドロお」

「白くてえドロドロしてえ」

あくまで練乳です

「んむう…ちゅぱ…おいひいよお」

「お姉ちゃんの苺もおーらい」

「やああー！」

あくまで苺を食べています

「男性には申し訳ないですが見苦しいのでカットさせていただきます」

「ああ美味しかったあ」

「しちそうさまー」

「さあ、そろそろ行きましょ？」

こうして私達は今玄関を出た

第十二話 俺達はパラレルワールドに行く事になった(前書き)

そろそろシリアス入りまーす

第十二話 俺達はパラレルワールドに行く事になった

『つーことで反省会だ』

『はい…』

『なんだ？あの展開は？』

『作者さんが…』

『なんでも作者のせいにするなよ！…！』

『…はい』

『作者が居なかったら今頃18禁だぞ！』

『…はい』

『練乳〓禁則事項じゃねえよ！』

『…はい』

『苺食べた事無いわけ無いよなあ！大好きだもんな！』

『…すみません』

『俺が会話の矛盾に気づかないわけねえだろ！？』

『…はい』

『清楚キャラだしいいかと思った俺が馬鹿だったわ!!』

『…はい』

『どーすんだよ!これから気まずくてシリアスな方向に行きにくい
だろ!?!』

『きつと時間が経てば解決しますよ』

『読み返せるんだよ!小説だから!』

『あー!』

『あ!じゃねえよ!マジどつすんの!?!』

『…脱ぎます』

『ますますますぐなるわ!』

『…はい』

『とりあえず謝れ、読者に謝れ』

『すみませんでした』

『おまえな、せめて胸の揉み合いまでだ、分かるか?』

『はい』

『良くてパンチラだ』

『はい』

『ギリギリで転んで男子とヤバイ体勢だ』

『はい…』

『それから先はR18だからな』

『はい』

『じゃあ解散!』

『お帰りい』

『ただいまって気づいてたの?』

『だってお姉ちゃん莓キライじゃない!』

『お見通しって訳ね』

『ねえお姉ちゃん、これからパラレルワールド行かない?』

『いいけど…何で?』

『行きたいところがあるの…』

『行きたいところ?』

「うん」

「男の子に戻るのか？」

「…うん、そうして？」

「…行くか？」

「うん」

こうして俺達はパラレルワールドに行く事になった…そのさきにあんなことがあるなんて知らずに…

第十三話 パラレルワールドの先には…

「な…何だよ、これ」

「し、死体の山…」

「いや、それよりもあれみろよ…」

「!?!、なにあれ…」

「きつとゾンビか何かだろ」

「バイオ○ザード？」

「いや、違う学○黙示録だ…」

「どつちも一緒じゃない」

「だが何故この山だけゾンビ化してないんだ？」

「それはウチが倒したからな」

「誰？」

「知らん、」

「あれ？ウチが呼びだしたのは確か女の子二人のはずだが…」

「呼び出した？」

「どっぴう事なの?」

「ウチがこの世界にアンタらを呼び出したのさ」

「話し戻すがお前誰だ」

「ウチは優希、確か違っ世界のウチだな?よろしく、もう一人のウチ」

「え?私は妹の紗季よ?」

「え?違っの?」

「優希は俺だ」

「そうなのか、ふうん、ウチが男になるとこんな感じなのか」

「いや、どうも俺は元々女の子らしいがとある理由で何年も男なだけだ」

「じゃあついてないの?」

「あるわボケ!」

「じゃあ手術か」

「違っわ!」

「ふうん…まあいいや、よろしくな」

「あ、ああ」

「アンタが居てよかったよ、この世界には男がいなかったから」

「そうなのか？」

「だからさ、よろしく頼むぜ？この世界でたった一人の男性何だか
らな」

「あ、ああ」

「よし！じゃあ殺るか」

「は？」

「殺らないと自分が死ぬぜ？」

「あ、ああ」

「本当大丈夫かよ、」

「大丈夫だ！」

こうしてゾンビだらけの世界に来てしまった俺達
生きて帰れるのか？

第十四話 パラレルワールドの俺、そして紗季

「ねえ、お兄ちゃん」

「なんだ？」

「私が来たかった世界じゃ無いのに何でこんなに頑張るの？」

「なんだよ、紗季らしくねえじゃねえかよ」

「ちょっと、ね」

「ん？アンタウチに嫉妬してんのか？」

「そついうのじゃ、無いけど…」

「なあ、紗季…」

「何？」

「パラレルワールドはな、その先にどんな世界が広がってるのかわかんねえんだよ、だから、どんなに辛い現状でも切り抜けないと駄目なんだ」

「分かってるよ…」

「じゃあどうしてそんなに暗そうにしてんだよ」

「…」

「…わかった、この話しはここまでだ」

「…うん」

「話しは終わったか？」

「ああ、」

「なあ、アンタさ、どうしてそんなに明るく居られるんだ？」

「俺なら解るはずだぜ？」

「…よく、解らないな」

「んな訳ねえじゃねえかよ、本当は分かってる筈だ、それにどんなに強がっても限界はあるんだ、本当はキツイんだろ？押し潰されそうで怖いから明るく、そして男勝りを演じてる、本当は優しい人間だ…違ったか？」

「…甘えても、いいのかな？もう、強がらなくていいのかな？」

「ああ、」

「…泣いていい？」

「ああ、時が許す限り泣け、今なら許される」

「う、うん」

第十五話 パラレルワールドの優希の過去（前書き）

今回はパラレルワールドの優希の正体が！

第十五話 パラレルワールドの優希の過去

この事件が起こるきっかけ、それは事件が起こる二日前に遡る…

「お兄ちゃん！」

「何だよ」

「またサバイバルゲームやって！少しは運動しなよ」

「うるせえ！別にいいだろ！別に俺が何やっても、紗季に迷惑かけたかよ！」

「何よ！せつかく心配してるのに」

「うるせえんだよ！…まあ、そんなに心配してくれるなら、考え直さなくてもいいけどよ」

「え？あ、うん」

「まあ、世界がどんなになっても俺が守るからな」

「え？聞こえなかったよもう一度言って？」

「なんでもねえよ」

次の日、兄が失踪した、それを追うように事件が起きた…

朝起きると周りの様子がおかしかった、家に人は居なく、変わり果

てた姿の両親が居た

「お母さん？お父さん？ねえ返事してよ！」

いくら叫んでも返事がない、家の前では扉が叩かれる音がしていた

「こんな時に…もしかしてお兄ちゃん？」

しかし、そこに居たのは失踪した兄ではなかった

そのかわりそこに居たのは人の為れ果てだった

そして私はこんな世界から逃れる為に兄の名を名乗るようになった

第十六話 パラレルワールドの優希の過去、そして出会い（前書き）

今回は第十四話まで話が進んでいます。

それもあるてかとても長く長くなった…

まあそれはさておき

過去編を抜けて次話からは優希SIDEに戻ります。

もしかしたらあの優希さんが出てくるかも？

第十六話 パラレルワールドの優希の過去、そして出会い

一体、兄はどこにいるんだろう？

もしかしたらもうこのゾンビ達の仲間になってしまったのだろうか？

「お兄ちゃん…」

駄目だ、弱気になると希望もなくなる。

「絶対見つけるんだ」

そう、クヨクヨしてたら駄目、強くならなきゃ

…でも、どうすれば？

そうだ、強く見せればいいんだ、強く見せれば強くなるんだから

「…さて、何か手がかりはないか、探すか」

兄を探してる途中でもゾンビは襲って来た、私は警官の死体から銃を取り、ゾンビを倒し、兄を探した、しかし、急に寂しくなって、言った

「強くなるために、仲間がほしい、だれでもいい、仲間が…」

その時だ、彼等に会ったのは

彼等は驚いていた、男の顔を見て縋り付きたくなったがその隣の女

を見て絶望した、私が居た、男は兄なのに兄ではなかった

二人でゾンビと死体の山の話をしている

「それはウチが倒したからな」

話し掛けてみたけど私のことは知らないみたいだ…とりあえずごまかそう

「あれ？ウチが呼び出したのは確か女の子二人のはずだが…」

「呼び出した？」

「どづいう事なの？」

「ウチがこの世界にアンタらを呼び出したのさ」

「話し戻すがお前誰だ」

私は紗季だけとお兄ちゃんが見つかるまではお兄ちゃんでしょう

「ウチは優希、確か違う世界のウチだな？よろしく、もう一人のウチ」

「え？私は妹の紗季よ？」

やっちゃった…でも気づいてないか…

「え？違うの？」

「優希は俺だ」

「そうなのか、ふうん、ウチが男になるとこんな感じなのか」

「いや、どうも俺は元々女の子らしいがとある理由で何年も男なだけだ」

お兄ちゃんが元々女の子？パラレルワールドだと性転換の技術が高いのかな？

「じゃあついてないの？」

「あるわボケ！！」

「じゃあ手術か」

「違うわ！」

…なんだろう？パラレルワールドのお兄ちゃんって何か面白い人だな

「ふうん…まあいいや、よろしくな」

「あ、ああ」

「アンタが居てよかったよ、この世界には男がいなかったから」

少なくとも私は見てないし

「だからさ、よろしく頼むぜ？この世界でたった一人の男性何だか

らな
「

「あ、ああ
「

…そろそろお兄ちゃんを探さなきゃ

「よし！じゃあ殺るか
「

「は？
「

「殺らないと自分が死ぬぜ？
「

「あ、ああ
「

「本当大丈夫かよ、
「

「大丈夫だ！
「

しばらくしてパラレルワールドの兄弟が話をしていた、こんな状況
なのに…

「話しは終わったか？
「

「ああ、
「

どうしてそんなに強いんだろ…

「なあ、アンタさ、どうしてそんなに明るく居られるんだ？
「

「俺なら解るはずだぜ？」

「…よく、解らないな」

「んな訳ねえじゃねえかよ、本当は分かってる筈だ、それにどんなに強がっても限界はあるんだ、本当はキツイんだろ？押し潰されそうで怖いから明るく、そして男勝りを演じてる、本当は優しい人間だ…違ったか？」

…そうだ、たとえパラレルワールドのお兄ちゃんでもお兄ちゃんなんだ、頼ってもいいんだ…

「…甘えても、いいのかな？もう、強がらなくていいのかな？」

「ああ、」

「…泣いていい？」

「ああ、時が許す限り泣け、今なら許される」

「う、うん」

そのあと私は涙が出なくなるまで泣いた

第十七話 優希の秘密

「…もう大丈夫だから」

「ああ、」

「ありがとう、お兄ちゃん」

「は？お兄ちゃん？」

「い、いや私」

「なあ、お前実は紗季なんじゃないのか？」

「！」

「お前が紗季だったらあの時紗季を自分だと言ったのもつじつまも合っ」

「…」

「なあ、詳しく教えてくれないか？」

「…確かに私は紗季よ、でも、お兄ちゃんが見つかるまではお兄ちゃんに居よう、強くならなくちゃ、何にも出来なくなるからそう決めたのに…」

「少しは俺達を頼っていいんだ、全部背負わなくても、いいんだ」

「…うん」

「辛いなら俺がいる、疲れたなら紗季がいるそれでいいだろ？」

「…ねえ、一つお願いがあるんだけど」

「なんだ？」

「しばらく女の子だけにしてほしいの」

「辛いのか？」

「お兄ちゃんが目の前に居るのに、私の知ってるお兄ちゃんじゃないのが辛くて」

「…わかった、ちょっと向こう向いててもらってもいいか？」

「構わないけど…」

「すまない」

『私の出番ですね』

『ああ、頼む』

『わかりました』

「もういいよ」

「…だれ？優希は？」

「これが私の本当の姿、私は二人で一人の人間なの、だから貴女のお兄ちゃんでもあるし、貴女のお姉ちゃんでもあるのよ」

「お兄ちゃんなの？」

「そう、私は優希、わかってもらえる？」

「ええ」

「そろそろお兄ちゃんを探しに行かないとね」

「うん」

そのあと私達三人は優希を探すために歩きだした

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6602x/>

俺とチートと性転換!?

2011年12月15日23時53分発行